

Article / 一般雑誌記事

# 三重大学の初年次教育：学生による修学支援体制構築を目指して

中川, 正

大学と学生. 2010, p. 40-46.

<http://hdl.handle.net/10076/11582>

## ● 事例 ●

# 三重大学の初年次教育

## 学生による修学支援体制構築を目指して

中川 正

(三重大学教育担当副学長)

### 一 はじめに

三重大学では、高等学校から大学への学びの転換を図り、大学の授業についていける基礎学力を提供する初年次教育について、共通教育と専門教育において、取り組んできた。

共通教育の英語に関しては、学生は入学時にTOEIC I Pテストを受験し、その結果に基づいて、能力別のクラスが編成され、学生の達成度に応じた指導がなされている。また、一年末まで四〇〇点に達しない学生に対しては、補習が義務化されている。理科系学部においては、基礎教育科目として、学科ごとに、数学、物理、化学、生物など

の履修を義務付け、専門への橋渡しとしての役割を担わせている。また「数学何でも相談室」に非常勤講師を配置し、訪れる学生のニーズに応じた個人指導も行っている。

学部専門教育においては、「オリエンテーションセッション」や「プレチュートリアル」などと呼ばれる初年次教育授業がある。その方向性に関しては学科ごとに方針が定められており、多様な内容を含むものであるが、高等学校からの転換教育としての役割を担ってきた。

このような体制は、大学にとって不可欠ではあるが、入学時の学力の多様化が進む中では、学生のニーズにきめ細かな対応を行うために、根本的な修学支援強化策が必要と

なる。三重大学では、そのために、二つの方策を打ち出している。

第一は、入学した学生を能動的学習者へ転換させることである。どのような修学支援を行っても、学生が受身の姿勢では効果は限定的にならざるを得ない。一方、学生が自らの学びの課題を自覚し、自らの意思で知識やスキルを獲得しようとする姿勢が身につけば、適切な支援が極めて効果的に機能するようになる。このために、三重大学では、二〇〇九年度より、全学クラス指定の「四つの力スタートアップセミナー」という統一プログラムによるセミナーを導入した。

第二は、学生が学生の修学を支援する体制を生み出すことである。統一的な補習では、個別の学生のニーズへの対応が困難であるばかりではなく、強制による学習意欲の喪失も懸念される。一方、非常勤講師による指導によって、個人に合わせた修学支援はできるが、一人の講師が対応できる範囲には物理的に限界がある。学生が学生の修学を支援することができるならば、これらの課題の解決の道が生まれる。三重大学では、二〇〇九年度より、そのような修学支援者を生み出す「キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム」をスタートさせた。

本稿では、三重大学のこの二つの取り組みについて説明したい。

## 二 「四つの力」スタートアップセミナー

### (一) 導入の背景

三重大学では、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、および総合力としての「生きる力」の養成を教育目標として掲げている。三重大学は、これを「四つの力」として学内外に周知を図っている。そして、この「四つの力」を伸ばすために、PBL（問題発見解決型学習）の全学展開、学生間の授業外での学習コミュニケーションツールである「ムードル」と呼ばれるコンテンツマネージメントシステムの整備、「四つの力」の経年的変化を測定する修学達成度評価システムの導入などを行ってきた。

一方、学生に「四つの力」とは何かに関する認識は生まれていないという問題点も浮かび上がってきた。三重大学の学生として入学したからには、本学の教育目標としての「四つの力」とその構成要素をばらつきのない形で認識することが必要である。大学生として必要な資質を明確に理解したうえで、学生たちは、修学達成度の経年変化を振り

返りながら、本学の授業を活用しつつ、自分に必要な能力を主体的に向上させていくことができるのである。このような能動的学習姿勢を身につけさせることこそが、三重大学における修学支援を効果的にする前提であると考えた。

三重大学は、この課題を解決するうえで、共通教育に、統一プログラムによる初年次セミナーを新設することが効果的であると判断した。既存の初年次プログラムを否定するのではなく、PBLに関する実績を生かしつつ、「四つの力」の共通認識を生みだしながら、能動的に自らの資質を育てる習慣を獲得させるセミナーを新設することによって、全学共通のプログラムと学部主体の多様なセミナーの両者を生かすことができると考えたのである。

本セミナーを導入した二〇〇九年度において、医学部、工学部、生物資源学部では必修科目、人文学部と教育学部では選択科目とした。その結果、前期受講者数は一〇二九名となり、一年次学生数の七四％であった。二〇一〇年度には、教育学部において必修となり、受講者割合は九〇％を超えることが予想される。また、人文学部においても、「四つの力スタートアップセミナー」の主旨を同学部の初年次セミナーの一部に取り込むこととなり、ほぼ全学的な体制として整備されている。

## (二) セミナーの内容

本セミナーは、一年次生を四〇名単位で学部別に編成し、全二八クラスで行われた。授業案は、高等教育創造開発センター専任教員と、四学部にわたる一〇名の教員によって作成された統一プログラムである。その授業の実施にあたっては、全二八クラス中、二六クラスが、初年次セミナーのために雇用した専門の特任教員が担当することによって、質の統一を図った。さらに、一クラスは授業案作成にかかわった教員によるオムニバス形式とし、その授業後に、毎回授業案に関する検討を行い、絶えず改善を重ねながら、首尾一貫した授業とする努力が重ねられた。これは関係教員の教育力向上に資するFDにもなっている。

授業内容設定のポイントは、「四つの力」を理解してもらうこと、ノートテイキング・情報リテラシー・レポート作成・プレゼンテーションなどのアカデミックスキルを獲得すること、グループ活動を通して能動的学習を推進すること、プロジェクト遂行を組み合わせた実践的学習を行うことである。

前期一五回の授業は、①大学への学びの招待、②グループ活動、③聞く方法、④意見を述べる方法、⑤テーマ設定

の仕方、⑥大学での学び、⑦ものの見方感じ方、⑧情報の検索、⑨⑩情報を読み解く、⑪レポートの書き方、⑫発表の方法、⑬⑭プロジェクトの発表と評価、⑮振り返りと今後への展開、となっている。

授業は、四〇人のクラスを四名程度の小グループに編成し、そのグループを単位に学習活動をさせた。毎回の授業の基本的要素としては、①デイスカッション、②講義、③グループプロジェクトである。

基本的な授業の流れを説明する。一回目から四回目までは、最初の四〇分間で流れの説明をして課題を共有する。全部の授業で、課題を出して自ら考えさせて、グループで共有する。たとえば、コミュニケーションの実践として、最初は目を見て話を聞き、次にそっぽを向いて聞くといったような印象を持つか、嫌なことを言ったらどう感じるか、などの活動を行う。次に、体験したことをもとに、効果的なコミュニケーションとはどのようなものかに関する短い講義を行う。その後には後半の活動に入る。五回目からは、授業後半の活動が「三重大学の魅力を紹介せよ」というプロジェクトとなる。三重大学について理解を深めてほしいという期待も含めて、「三重大学の魅力」というテーマを設定し、自分の高校に戻って三重大学の魅力をプレゼンテ

ーションすることを想定した課題とした。

授業の最後には、各グループは、今回の授業で自分たちはどんな力がついたかを考えなければいけない。グループ番号と記入者名、集まった場所を書く欄もあり、グループメンバーそれぞれの氏名を書く欄では、「学習時間はどれくらいだったか、何を学習してきたか」ということを書かせて毎回提出させている。このように、自己省察を習慣化させて、次の授業に生かすように指導した。

### (三) 導入年の成果

「四つの力スタートアップセミナー」を導入した結果、以下のような効果が表れている。

第一に、学生のコミュニケーション力や協調性が向上した。修学達成度評価で、受講前と受講後の比較を行うと、非受講者では個人志向や互恵懸念（グループで活動することに対する抵抗）が向上するのに対して、受講者では両者とも低下している。学生による自由記述によると、「コミュニケーション力がついた」とか、「人と話し合うことに抵抗感がなくなった」という意見が多かった。

第二に、不適応学生の早期発見と対処が可能になった。三人の心理学専攻の特任教員で大多数のクラスを担当する

ために、一年次生全体の適応状況にある程度網羅的にみる  
ことができ、グループワークの過程で発見した不適応学生  
に対しては、学生何でも相談室のカウンセラーや、学部の  
担当教員との連携などができるようになった。

第三に、「三重大学の魅力」というプロジェクトを行っ  
たために、三重大学に対する愛校心のようなものが芽生え  
てきたように思われる。

このように、能動的な学習姿勢への転換を目指すセミナ  
ーを通して、大学に対する肯定的な評価が生まれ、適応障  
害に対する早期対策ができ、学生同士で教えたり教えられ  
たりする抵抗感が低下したことは、修学支援を行ったり受  
けたりするうえで的前提が生まれてきていることを示して  
いると思われる。

### 三 キャリア・ピアサポーター資格教育プログラム

キャリア・ピアサポーター資格教育プログラムは、この  
「四つの力スタートアップセミナー」で身に付けた学習習  
慣を、キャリア形成に生かすと同時に、修学支援者を育成  
すべく準備されている。初級資格取得者は、学生支援の業  
務に参加するための基礎的な素養が認定され、学生の個別

学習補助にかかわることができる。また、上級資格取得者  
は、共通教育や学生総合支援センターにおけるSA（ステ  
ューデント・アシスタント・授業や補習の補助者）に申請  
する資格を得る。いずれの資格も、履歴書に記載が可能で  
あり、就職活動に生かすことができるものとして、履修を  
勧めている。

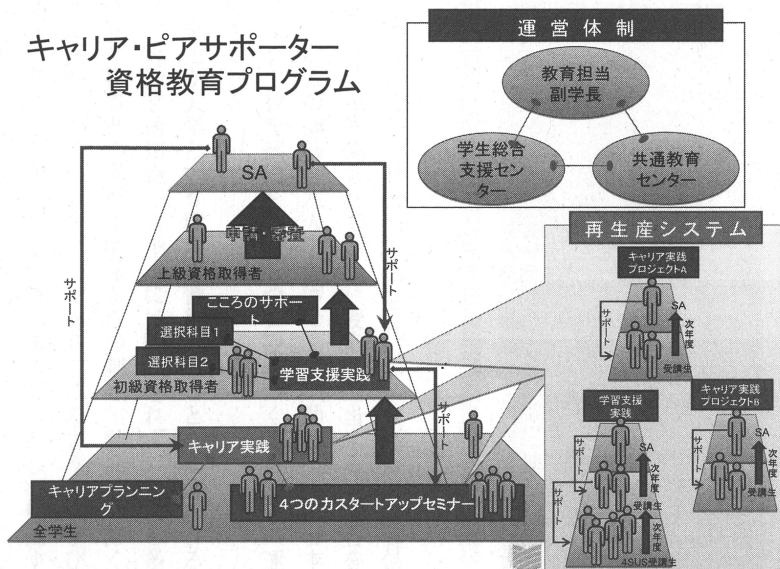
初級資格取得のためには、「四つの力スタートアップセ  
ミナー」に加えて、「キャリアプランニング」および「キ  
ャリア実践」科目を取得しなければならない。「キャリア  
プランニング」は、さまざまなワークシートやレポートを  
通して、各人の将来の進路や生き方についてプランニング  
する科目である。そして、「キャリア実践」は、大学にお  
ける広報誌作成、キャリアガイダンス、アカデミックイベ  
ント、学生サポート、入試広報などの業務を、学生が主体  
となって行う教職学生協働の実践的な科目である。

この三つの科目を履修し、初級資格を取得した学生は、  
上級資格取得のために、「学習支援実践」、「こころのサポ  
ート」および選択科目二科目の単位取得が必要である。  
「学習支援実践」は「四つの力スタートアップセミナー」  
のファシリテーション実習である。「四つの力スタートア  
ップセミナー」は三〇クラス近く開講されるので、そのう

ちの一つに参加して、教員の補助をするとともに、学習のねらいを理解したうえでさらに良い教案を提案するという内容のものである。「こころのサポート」は、学生支援をするうえで最低限必要なこころの問題に関する知識を得るものである。選択科目には、起業のための「アントレプレナー論」や「キャリア・インターンシップ」などが含まれる。

このようにして、上級資格は最短で二年次前期末に取得が可能となる。上級資格取得者は、SAとしての申請資格が得られるために、二年次後期から、授業補助に加わる事ができる。後期には「キャリア実践」諸科目が開講されるので、たとえば前年度広報誌作成を行った学生が、同じ内容の授業のSAとして雇用されるなど、学生が学生をサポートしながら実践力を身につけることができる(下図)。さらに、三年生になると、「四つのカスタートアップセミナー」や「学習支援実践」のSAとして雇用が可能となり、三重大学が教育目標とする、「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」および総合力としての「生きる力」を自ら獲得しながら、他の学生にも伝えていくことができる。学生の養成を導くプログラムとなっている。

### キャリア・ピアサポーター 資格教育プログラム



四 おわりに

「四つのカスタートアップセミナー」もキャリア・ピアサポーター資格教育プログラムも、二〇〇九年度に開始したばかりのプロジェクトであり、その評価は今後の成果次第である。二〇〇九年度にはキャリア・ピアサポーターの初級資格取得者を一三名生み出した。現在、彼らの活躍の場としての、学生修学支援室、ラーニングコモンズなどの整備を進めている。今後、学生同士が修学支援を行う、活気に満ちたキャンパスをビジョンとして描きながら、体制整備を進めていきたい。